

## 卒論指導の臨床教育学のために

毛利 猛

(香川大学 教育学部)

多くの（文科系の）大学教員にとって、講義、ゼミナール、そして卒論指導の三つが、大学における主だった教育の仕事になるであろう。もちろん、これ以外の教育活動にも、大学教員はかなりの時間を割いているし、上の三つの教育活動が、まったく重なり合わないわけではない。たとえば、履修表の上では、講義形式となっている授業でも、受講者の数によってはゼミナールっぽい授業になるし、またゼミナールのなかでは卒論指導も行われている。しかし、それでもやはり、大学における教育の仕事の中心は、講義とゼミナールと卒論指導の三つであるといつて間違いないだろう。

ところが、この三つの教育活動のうち、ゼミナールと卒論指導のあり方に関する研究はあまりなされていない。とくに卒論指導については、ほとんど手付かずといつてよい。教育がローカルな営みであり、それぞれの大学の学生の質や専門の違いによって、その指導のあり方が大きく異なることが、手付かずにままたった理由の一つであろう。また、大学における教育実践として、卒業指導があまり重視されていないということもあるかもしれない。しかし、われわれと卒論生との指導関係、および指導過程において繰り返し起こり、その見かけの個別性、特殊性にもかかわらず、実は、学問的に扱えることは決して少なくないし、「学部教育の向上」を図るためにも、卒論指導のあり方を見直すことは、大事な課題であるはずである。

ところで、大学教員の教育活動を評価することは大変難しい。最近、多くの大学・学部で「学生による授業評価」が実施されるようになったが、それはあくまでも、多様な「教育活動の評価」の一項目（もちろん重要な項目ではあるが）にすぎない。その他の項目として、たとえば、ある学科やコースのなかで、それぞれの教員がどれぐらいのゼミ生や卒論生を抱えているかは、彼らの学識と教育する力を測るための、かなり正確なものさしになると思う。

私の卒論指導は、3年次の後期から始まる。ゼミナールの時間に「何に関心があるのか」を尋ね、その関心を深めるための文献を紹介する。ただし、そうした文献を読み進めながら、自分の問題意識を明確にすることができるゼミ生はごく僅かである。たいていの学生はすぐに挫折する。なかには、文献を読むたびに、「何か違うような気がする」といって、関心がころころ変わる学生もいる。こういう学生は、「これでもない、あれでもない」と迷った挙句、私が最初に「読んでみたら」と勧めていた人物（の著作）に戻ることも多い。

卒論のテーマ設定に当たっては、教員が「押しつけた」わけではないけれども、学生がまったく「自由に」決めたわけでもない。学生の関心を尊重しつつも、やはり、教員が「見通し」をもって「導いて」おり、その指導によって、学生が自分の問題意識に目覚めるようでありたい。

私の所属するコースでは、3年次の2月末までに「題目表」を提出して、そのあと「構想発表会」を終えると、学生たちは一旦卒業論文から遠ざかる。就職活動や教員採用試験のためである。

それが一段落する夏休みの後半に、やっと論文作成の取り組みを再開する。長いブランクを挟んで最初に行なうのは、ノートないしカード作りである。もう一度文献を読み返し、重要なところを要約・抜粋しながら、メモをとる。その作業のなかで、自分なりに論点を整理し、論文の構想を練るのである。この作業を10月のはじめごろまで行なう。

問題は、そこからである。学生たちはなかなか書き始めようとしなない。書くことに対する、学生たちの心理的抵抗は強い。何かと理由をつけて、書くことを先延ばししようとする。結局、「それじゃ、来週までに第〇節を書いてきなさい」といって、とにかく毎週書いたものを持ってこさせるしかない。

人間の学問には、自分の問題に引き寄せようとする主体化的方向と、逆に普遍的な表現を与えようとする客体化的方向があり、われわれの学問研究はこの二方向の往復運動によって深まっていく。ところが、学生たちには、このような行き来の中に均衡をとるのが難しいようである。彼らはどちらかに著しく傾斜しており、そのことは、彼らの卒業論文の書き方にもよく現れている。すなわち、一方で、自分なりの問題意識は強いものの、それを客観的な統一にもたらず努力をしない学生がおり、他方で、借り物の体系を要領よくまとめるだけで、それを自分の生活現実と結びつける努力をしない学生がいる。私の卒論指導においては、前者には「独りよがりな文章を書くな」と言い、後者には「もっと自分らしさをだせ」と言うという具合に、絶えず学生の傾向と相反する方向を強調していくことになる。

これは学生の側からすれば、自分ない「傾向」をつねに求められるわけで、かなり苦しいことである。ときには、私と卒論生との指導関係が、一時的に「険悪に」なることもある。しかし、このお互いにとってつらい時期を乗り越えて、何とか書き上げたときのほうが、やはり成果は大きいように思う。

私と卒論生との指導関係は、かつて私が学生の立場で経験した指導関係より、よく言えば面倒見がよい、悪く言えばややお節介ともいえる関係である。研究大学と比べれば、学生との「距離」もずっと近いはずである。10月の後半から、卒論生たちとは、ほぼ週一回のペースで顔を合わせる。学生が書いた一週間分の草稿に目を通すのである。ただし、当初学生が期待するほど、文章の一字一句を手直しすることはしない。学生に「雑なものを書いても、先生が直してくれる」と期待させないためである。書き直すのは、あくまでも学生である。とくに初めて草稿をもってきた日の指導は大事である。その日は午前中に会う。たいてい、つぎはぎして作り上げたものか、勝手なことを書いたものである。夕方までに書き直してこいと言って、6時間後にもう一度会う。これを最初にするだけで、学生たちの卒業論文への取り組み方が変わる。それ以後、本当にもがき苦しみながら書くようになるのである。

私を指導教官として選んでくれた学生との間に、このような学問を介した交流がもてることは、私にとって大きな喜びである。今回は、私自身の指導過程や指導関係の反省に基づいて、大学における卒論指導のあり方について考察した。